

米 洲 行 日 誌 (1)

山 本 一 清



四たび太平洋を渡る。こんどの旅行は第一ペル 1 に於ける皆既日食観測のため、第二ブラジルに於ける天文研究指導のため、第三北米合衆国内の天文臺視察のため——此の三つの目的をもつて、昨1936年の秋から、計畫し、熟慮し、奔走した結果である。日食準備のためには、大學内の多くの同僚の協力と共に、大阪の大高啓三郎氏と東京の五藤齋三氏との援助を獲た。ブラジルへの興味は外務省當局の斡旋と、又、船の出帆の間際まで間斷なく送られた神屋信一氏等の通信と、與謝野修氏等の終始熱烈なる勧誘とによつて決心を促がされた。最後に、北米各所の天文臺視察は今日の天文學術の進歩發達に隨一の貢獻をなしつつある此の偉大なる國の學府への敬意と、更に、同行の若き2學徒を此等の學府へ紹介したい老婆心と、此の二つからの希望による。

旅行の計畫以來半ケ年、内外諸方面からの聲援は多く受けたけれど、豫算の問題と、多方面に渡る目下の我が公的責務のために、今年に入るも確たる決斷をするに至らず、一時は惜しくも此の全計畫を放棄すべきかと案じたほどであつたが、3月初めに至つて上山勘太郎氏の義氣により、又、山本邦之助、藤澤玄吉、伊藤竹之助、野々宮元藏諸氏の有形無形の厚意により、愈々此の旅行を決行することとなり、尙ほ其れに、文部、外務、拓務各當局からの激勵もあり、又、在東京のペル 1 國公使シュライベル博士其の他の高官たちや、在ペル 1 の官民邦人各位諸方面からの聲援もあり、益々吾々の決心を堅くせしめたものである。

3月中頃に至つて、一行中に加はる豫定の荒木助教授が家庭の事情により、参加を中止したのは残念であつたが、観測其の他の事は3人が全責任で遂行することと定め、3月29日22時45分、多くの公私友に見送られて京都驛を出發した。

翌3月30日東京着、3人直ちにペル 1 公使館を訪問、午後は又、横濱でペル

1 國と合衆國との兩領事館を訪ねて旅券の査證を受けた。此の夜は、南澤の自由學園を訪ねて、少年たちが作つた口径20糎の反射望遠鏡で、金星其の他を處女觀測した。

次で31日は13時から 3 人共にベル 1 公使館での送別午餐會に招かれ、公使シュライベル博士、横濱の領事ダ弗ラ氏及び公使館附武官メンド 1 ザ大尉と歡談した。又、18時からは YMCA で有志主催の送別會あり、ついで直ちに講演會が開かれ、

“南太平洋上の皆既日食”

柴 田 理 學 士

“何故ベル 1 に行く？”

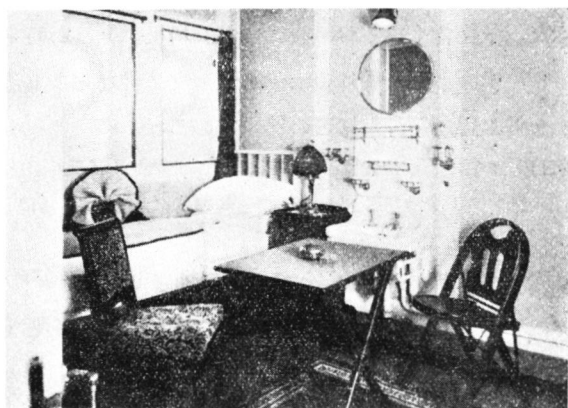
山 本 (團 長)

“太陽と日食”

堀 井 理 學 士

の順序で講演をした。

4月1日 愈々氷川丸出帆の日である。朝 9 時半、ホテルに關係者一同集ま



— (船 室) —

り記念の朝食をとり、其の後、柴田、堀井兩君は見送りと公務を兼ねて横濱へ出發。自分は荷物など引きまとめ、英子、進、土居氏等と正午東京驛發、NYK 横濱支店や太平洋貿易支店に立ち寄つた後、13時40分、B 棧橋より氷川丸に乗つた。早乙女博士ほか數10名見送られた。船は豫定の如く15時解纜、港外にて暫時停船の後、17時出帆した。天氣は晴朗で、海峽内外は西南の風が可なりあつたが、房州沖あたりからは追手となり、動搖も殆んど無く、まことに静かな海上を行く。20時過ぎ、晴れた空の西部に、銀河まで突入する黃道光を見る。——今夜は、何となく疲れてゐるので、21時眠る。室は353號

より375號の廣々としたのに變更された。今夜は時計が30分進められる筈。

4月2日(金曜日) 正午の船の位置、東經144°49′、北緯37°28′、横濱より330哩、バンク1ワ港へ3970哩、氣壓761.5耗、氣溫15°、水溫13°。

終日天氣良く、展望ひろし。午後曇り。雪を甲板に見る。室内にあつて米大陸旅行計畫と、原稿かき、寫眞術の研究。

4月3日(土曜日) 今日には神武天皇祭、海上は終日晴れ、微風、まことに平穩な天氣である。正午の船の位置は東經151°41′、北緯40°51′、昨日より379哩航走。横濱より709哩、バンク1ワ港へ3591哩。氣壓760.0耗、氣溫11.0°、水溫8.5°。今晚、時計は35分進められた。

朝8時に眼がさめ、食事後、暫く甲板を散歩して、室に歸り、米國內に於ける飛行航路と、大陸バス線を研究する。シャトルからロスアンゲレスまで汽車か、バスか、又は飛行すべきか？

一昨日、横濱出帆の時、羽仁氏から頂いたアデリヤの赤い花が室内で三つ四つ咲き始めた。午後暫くひるね。夜は食堂で皆集まり、21時半まで活動寫眞あり、今年初、米國東部に於ける大洪水のニウス畫などあり、實にノアの洪水の記者も想像し得なかつたほどの慘事である。

4月4日(日曜日) 正午の船の位置は、東經159°02′、北緯44°06′、昨日より航走379哩、横濱より1088哩、バンク1ワ港へ3212哩。氣壓758.5耗、氣溫5.5°、水溫3.0°C、風は北北西3米。

終日可なり強いうねりがあつた。空はドンヨリ曇りで、時々日光がもれる。室が寒いので、一等サロンに頑ばつて手紙など書く。午後から室にも暖かい空氣が送られて来るやうになつた。食事を少しひかへめにしてゐるので、お腹がすいて、誠に心地が良い。横濱出帆まぎはに高城君から轉送された神屋君からの信書をくりかへし讀んで見て、ブラジル行きの計畫をいろいろと考へて見る。

4月5日(月曜日) 正午の船の位置、東經167°15′、北緯46°34′、昨日より航走377哩。横濱より1465哩、バンク1ワ港へ2835哩。氣壓759.0耗、氣溫3.5°、水溫2.2°C。風は西4米。

今日も昨日と同様に、うねりは可なりあつた。朝ねをしたが、終日室内で手紙をかいたり、整理をしたり、割に忙しかつた。午後、船長室へ航海曆を見せて貰ひに行つたが、あひにく船長は不在で、ひとり甲板を散歩した。外

は寒いけれど、室内は温室のやうに温い。横濱出帆以來、今日も天氣は良く、揺れも無く、まことに文字通り太平洋である。夜は夕食後、又活動寫眞の映寫が食堂で開かれた。10時入浴。今夜過ぎ、時計は40分進む筈。

4月6日(火曜日) 晴曇。正午の船の位置、東經176°07′、北緯48°40′。昨日より航走381浬。横濱より1846浬、ワシントン港へ2454浬。氣壓765.0托。氣溫7.5°、水溫2.0°C。西風5米。

今日は僅かにうねりがあるばかり、心地良い海上である。8時起床。朝食後、船室へ鋳内晴磨船長が話しに來られた。聞く所によると鋳内氏は約15年前、自分が初め渡米の此の航路で乗つた富山丸の船長吉田金作氏の後任者として富山丸に暫く乗つてゐられたと言ふ。航海中の日本船と日本との間の無



— (船内食堂) —

線電報は世界中どこからでも1信80錢であるとは驚くほど安い。

終日、室内で書き物をする。出帆の時の寫眞が出來て來た。——今日は柴田、堀井兩君の乗つてゐるノルエ1丸が横濱を出帆した筈である。歓迎の祝電を打つ。夜半過時計35分進む筈。

第2の4月6日(やはり火曜日) 曇。正午の船の位置、西經174°07′、北緯49°44′。昨日より航走388浬。横濱より2234浬、ワシントン港へ2066浬。氣壓762.0托。氣溫4.5°、水溫2.3°C。風SSW、4米。

朝9時に起床。室内で食事した。終日、談話室で書きもの。柴田、堀井兩君から愈々ノルエ1丸で出帆したとの電報が到着した。昨夜中に經度180°を越えて西半球に入つたので、アメリカへも近くなつたわけ。無線室に入つて、

ブンク17港の清水牧師へ電報を出した。

夕食はスキヤキ。皆んな大はしやぎ。今夜中に時計40分進む筈。

4月7日(水曜日) 曇。正午の船の位置、西經 164°41′, 北緯 49°57′, 昨日より航走365 哩。横濱より2599哩, ブンク17港へ1701 哩。氣壓744.8耗, 氣溫3.0°, 水溫 2.2°C。風 SEE, 6米。

朝 8時半に起床。波は幾らか高い。終日書きもの。料理が良いので吾々の テ1ブルから料理長へビール半打贈る。夕食後は活動映畫, 主として喜劇もの。今夜中に時計が40分進む筈。

4月8日(木曜日) 漸次晴れる。正午の船の位置、西經155°05′, 北緯 49°57′, 昨日より航走370哩。横濱より2969哩, ブンク17港へ1331 哩。氣壓745.0耗, 氣溫3.8°, 水溫 3.5°C, 風 NEE, 3米。

朝起きたのが遅くて、食事は室の中です。15時半, 船長の御茶の會あり, キヤビン客皆集まつたが、大したことは無かつた。天氣は良くなり、青空が見えるやうになつて來たが、長周期のローリングは尙ほ續く。夕食後入浴。午後、船客名簿が配布された。今夜中に時計は35分進む筈。

4月9日(金曜日) 晴れ。正午の船の位置、西經 145°46′, 北緯 50°10′, 昨日より航走360哩。横濱より3329哩, ブンク17港へ971哩。氣壓753.7耗, 氣溫 8.2°, 水溫 4.5°C, 風 NW, 5米。

どうも時計が毎夜々々進むので、朝起きにくい。天氣は晴れた。もはやしけはあるまいと人々は話し合つてゐるが、うねりは強い。今日も終日室内で書きものした。午後、京都の退役船長太田氏が室に話しに來られた。夕刻、西の晴れ間から日沒を見たが、緑閃光は、双眼鏡を持ち合はせなくて、見えなかつた。今夜中に時計は40分又進む。

4月10日(土曜日) 晴れ、浪高し。正午の船の位置、西經 136°02′, 北緯 49°58′, 昨日より航程375哩。横濱より3704哩, ブンク17港へ596哩。氣壓755.0耗, 氣溫9.0°, 水溫 6.0°C, 風 W, 6米。

うねりが高くて、今日は終日左右へ 20° づつもローリングをしたので、食堂でも、室の中でも、安定ならず、食卓には杵をはめた。しかしローリングの周期が長いので、誰も酔ふ人はない。

午後、名古屋からトロントに歸るニウマン氏と甲板で話した。トロント大學の新天文臺や、ミルマン君のことなど。夕食は御別れの晚餐で、賑やかであつた。夜は明日發送の手紙をかく。